

「『新・学問芸術論』——知と徳と霊性」 小林正弥  
第4回 フィロソフィア@東京 7月10日(日)

1 知・徳・霊性の三位一体——諸徳一致、霊徳一致、知徳一致、霊知一致

(1) 徳と霊性——霊徳一致

徳 初期対話編の中心的主題 個別の徳

アレテー 原義 よさ、優れてあること、卓越性 積極的な能力 (1, 51頁)  
ホメロス 強さ、アテネ 政治的能力 必ずしも倫理的観念ではない  
⇔ソクラテス 魂がすぐれたものにする事  
「『徳』に対する旧来の観念に対する、斬新で根本的な変革」(1, 50頁)  
ソクラテス—プラトンにより、徳が魂、即ち霊性と結合した=〈霊徳一致〉  
近代以降 マキャヴェッリ的な *virtù* (力量) ソクラテス以前への復帰

(2) 知と徳——知徳一致

ソクラテスの主要テーゼ「徳は知である」 徳  
徳—知—教えることができる →徳そのもの

『メノン』 前期から中期への移行

背景 『プロタゴラス』 諸徳

他の初期対話編 反道徳・反哲学 カリクレス (『ゴルギアス』)

→世俗道徳の吟味 知恵 (思慮、『カルメニデス』)、節制、  
勇気 (『ラケス』)、正義、敬虔 (『エウテュプロン』)、友  
愛 (『リュシス』) → 〈諸徳一致〉

徳とはそもそも何か? 真の道徳の探究 定義?

アニュトス ソフィスト批判

優れた人が子供に伝えられない例

(表面的) 結論 教えることはできない→知識ではない。神の恵み。

しかし、本当は「徳自体はそもそも何か?」を考える必要性

※今日に喩えて言えば、(悪しき意味の) 実学 (専門学校、国立大学法人化、ロー・スクール、ビジネス・スクールなど) で「卓越性」の習得を謳って金銭を対価として取っているようなもの。これは、道徳的でない卓越性の技術的教育。これに対して、真の知識に裏付けられていないそのような方法では、徳は教えることはできないとし、そもそも「徳とは何か?」を考える必要性を指摘した。ソクラテスの言う「徳」は技術的卓越性ではなく、魂に関わる道徳的な美德。

想起説 ミュートス 輪廻転生 もともと知っていた→デカルト 生得観念  
ミュートスの意義と限界 自ら理解 侍童の例

仮設法

知識/正しい臆見

原因 (根拠) の思考→イデア論 = (超越的) 形而上学へ 〈超越的倫理学〉

〈真知＝深知〉／〈偽知＝浅知〉

ソフィスト 「徳はソフィスト的な偽知では教えられない」「徳は真知なしには教えられない」という結論

「無知の知」と同様に、「徳は教えられない」という「教育不能の知＝不能の知」

カント的な表現を用いれば、実践理性（教育）批判

⇨深層の示唆 「徳とは何か」を洞察すれば、そのような真知に立脚して初めて徳を教えることが可能になる。

即ち、 諸徳一致、〈知徳一致〉

(3) 霊と知——霊知一致

霊徳一致＋知徳一致→〈霊知一致〉 霊性と一致する知——〈智ないし叡智〉と定義

フィロソフィアの説明

●スピリチュアルな叡智を愛し求める会 〈霊知一致〉→〈霊知（霊智）革命〉

●公共的霊性を中心に哲学的に考える会

霊性だけではなく、智と徳（倫理・道徳）と霊性との三位一体

cf. 霊性のみを強調する悪性カルトとの相違

→日常生活での適用、現実的世界変革への必要性

(4) アリストテレスの徳論——目的論的倫理学

『ニコマコス倫理学（上・下）』（岩波文庫）

倫理学——政治学の部分

最高善＝幸福（エウダイモニア）

善—目的—行為（善そのものは空虚、…にとつての善）

徳 総括——正義の徳 終極的な徳 正しい人

思考の働きとしての徳 理性

・賢慮（フロネーシス） 行為 実践理性 個別の状況

・知恵（ソフィア） 観照 理論理性・学問的知識

人柄としての徳 もの惜しみしない、節制など

中間 中庸の倫理説

友愛 共同体の基礎 →共通善

プラトンのイデア論（〈超越的形而上学〉）批判→〈目的論的形而上学〉＝善  
〈目的論的倫理学〉

⇨儒教 王陽明 知行合一

この言い方なら、〈諸徳合一、霊徳合一、知徳合一、霊知合一〉

致良知 本心 朱子学に対して、心による直観的理解を強調

プラトンの直観知との関係

## 2 学問芸術論

### (1) ルソー『学問芸術論』(1756年)

啓蒙批判 ディジョンのアカデミーの懸賞論文、カシの木の下での靈感  
アカデミー ルイ14世(1643—1715)設立

1635 アカデミー・フランセーズ

1 碑文・文芸アカデミー

1666 科学アカデミー ディジョン・アカデミーは地方アカ  
デミーの一つ

学問芸術の進歩→習俗の腐敗、徳の衰退 弊害

(徳を持っていないのに持っているように見せかける)

例：ソクラテスの学者・芸術家批判

・無為 時間の浪費

・奢侈 習俗の墮落、趣味の腐敗、真の勇氣・道徳的気質の退廃

→救済の道 F・ベーコン、デカルト、ニュートンのような天才  
=人類の教師 独力(⇔凡人)

「おお、徳よ！ 素朴な魂の崇高な学問よ！ お前を知るには多くの  
苦勞と道具とが必要なのだろうか。お前の原則は全ての人の心の中に刻みこま  
れていはいしないのか。お前の掟を学ぶには、自分自身の中にかえり、情念を静め  
て自己の良心の声に耳を傾けるだけでは十分ではないのか。ここに真の哲学が  
ある。…」

当時の学芸批判→徳 良心 真の哲学 cf. 王陽明の良知に相当  
ソクラテス=プラトンのソフィスト批判に一致。

古典啓蒙批判→近代啓蒙批判

ただし、ルソー自身は、プラトンほどは徳論を本格的に展開しなかった。

カント——内面的道徳(形式的)、

ヘーゲル——人倫で客観的制度(客観的精神)を扱った反面、個々人の徳  
については軽視。主観的精神。

### (2) 日本政治学論

国家学会への提出論文

ルソー 当時の学問=啓蒙思想(機械論・唯物論等)に対する痛烈な批判

→『人間不平等起源論』『社会契約論』→フランス革命への思想的原動力

→日本政治学批判

現存のアカデミー ・戦後近代政治学 戦後啓蒙 丸山眞男

→実証主義的政治科学 自然科学→アメリカ政治科学

レヴァイアサン(怪獣)政治学！

・ニュー・アカ——ポスト・モダン 反アカデミー

→真なるアカデミーへ =永遠の学

——政治学の自己変革、内的革新

——新構造主義的政治学、全体論的政治学

→日本政治学だけではなく、今日の学問芸術についても啓蒙批判を行う必要性

ソクラテス＝ルソー的な問い

大学の研究者や思想家・評論家は、徳を教えることができるかどうか？

今日の学問・芸術は、習俗の純化・徳の向上に寄与しているかどうか？

→むしろ習俗や徳の退廃を促進している。→社会問題に

→学問改革論へ その中の美德論

### 3 美德倫理学の復興

#### (1) 美德以後

マッキンタイア『美德以後』(1981) コミュニタリアニズムの代表者の一

人、倫理学者——美德倫理学の復興

美德倫理学 人間の能力としての美德 アリストテレス的美徳倫理学

今日の道徳的破局 道徳的貧困化

←道徳を正当化しようとする啓蒙主義のプロジェクトの失敗

スマイス・ヒューム・ディドロ・カント・キルケゴール

啓蒙主義的哲学者 人間本性についての諸前提から道徳的規則や

教示の権威について結論を導出しようとした

実際には、古典的・有神論的道徳的枠組み

①未教化の人間性(偶然そうあるところの人間、現実態)、②理性的倫理・教示、③自らの目的を実現したら可能となるところの、人間の本質的性格(人間本性、可能態)

悪徳を禁じ、美德を勧める②により、①→③

しかし、③目的論的観念がなくなったため、啓蒙主義的哲学者は①現実の人間性から②道徳的教示を論証しようとしたが、そもそも無理。

→ 分析哲学 事実を言明する諸前提・諸命題(である、is)からは、いかなる道徳的・評価的結論(すべき、ought)は導けないという「論理的真理」

→ 「全ての評価的・道徳的判断は、好み(preference)、即ち態度(attitude)・気持ち(feeling)の表現に他ならない」  
=主観主義的な情緒主義(emotivism、感情主義)

→ニーチェ(道徳の内容についての信念は意思の非合理性を隠蔽する合理化として説明されなければならない)かアリストテレスか？

#### (2) 美德論

歴史的変化

英雄時代(ホメロス) 勇気、友情、忠誠心、敬虔

アテネ 友情、勇気、自制、叡智、正義

(プラトンの諸美德の統一性とは異なった美德同士の衝突)

アリストテレス 知性的美德（賢慮など）＋性格的諸美德、友愛によるポリス  
 ストア哲学 宇宙的秩序に仕える神的な生 単数の一元的美徳  
 中世 英雄時代の徳が残りつつ、古典的な4枢要徳（正義、賢慮、節  
 制、勇気）＋神学的諸徳（信仰、希望、慈愛）  
 ジェーン・オースティン（キリスト教的） 志操堅固、親愛  
 ベンジャミン・フランクリン（功利主義的） 清潔、沈黙、勤勉なども含む

#### 徳のプラトンの一元論批判→

このような多様性にもかかわらず、それを統一する核心的概念

- 1 実践 (practice) 卓越性や目的達成を追求する、一貫した複雑な形態の、社会的に確立された協力的人間活動。

美德とは、会得された人間の資質であり、それを保持し行使すると私達は実践にとって内在的な[良き]ものを達成することができるようになる傾向があるし、それを欠くと、私達がそのような[良き]ものを達成することに重大な支障が生じる。

内在的善 外在的善

- 2 一つの人生の物語的秩序 統一的人生—善き人生、他者との共同脚本家として物語的歴史、物語的自己、物語的探究

美德とは、善の探究において、困難を乗り越え自己と善についての知識を増やすことを可能にする性向

- 3 道徳的伝統 諸々の共同体、伝統

実践や一人の物語的人生に、必要な歴史的文脈を与える「十分な伝統感覚」

「①個人を超えた協力という全体性、②人生という時間的全体性、③共同体の伝統という時空間的全体性」

#### (3) 倫理—政治理論

→自由主義・保守主義・急進的・社会主義のいずれの近代政治も斥け、「暗黒時代において礼節と知的及び道徳的生活にも支えられるような地方的形態の共同体再建」——新たな「聖ベネディクトス」の出現を待ち望む

美德倫理学—コミュニタリアニズム 〈アリストテレス主義的倫理—政治理論（美德—小共同体主義）〉

#### (4) 美德—小共同体主義の限界

- 1 保守主義・権威主義…自由主義・近代的理論批判の余り。伝統強調。
- 2 相対主義…特定の共同体に囚われている。嬰兒殺しや奴隷制は？
- ③特殊主義…普遍性の不存在

『誰の正義？ どの合理性？』（1988）や『道徳的探究の3つの対抗形態』

(1990) では、各種の伝統にそれぞれの合理性（諸正義、諸合理性）が存在して、諸伝統間の対話などによって理論的に対理的に発展するとして、①・②に対応しようとする。

アキナス——「アウグスティヌス+アリストテレス」という対理的総合——トマス主義的アリストテレス主義に

しかし、修正改良主義とまりで革新、創造には言及せず——限界。相対主義も克服できず。

#### (5) 新コミュニタリアニズム

(地方的) 小共同体主義 / (国家的) 中共同体主義 / (文明的・世界的) 大共同体主義

特殊主義 国家主義を批判して地方的共同体主義——懐古的・時代錯誤的になる危険性

→新共同体主義、多層的・多元的共同体主義 普遍的・宇宙的共同体主義を根底に置いて、中・小の共同体主義を包括する大共同体主義

#### (1) 西洋的倫理—政治理論の非形而上学的・歴史主義的再生

歴史的・事実的共同体主義

非存在論的・非形而上学的 倫理—政治理論

⇔存在論的・形而上学的 倫理—政治理論

(超越的[内在的] / 目的論的)

### 4 形而上学的美徳—倫理学の再生

#### (1) 超越的美徳—倫理学

マッキンタイア的美徳—倫理学の限界を乗り越える

美徳の根拠——根拠における統一性

革新的 (にもなりうる) ・普遍主義的 (形而上学的・超越的美徳—倫理学)

超越的・目的論的 両立

→学問改革の一環、美徳や習俗の向上に寄与するような学問に。

知・徳・靈性の三位一体

→靈的人文主義として、例えば悪性カルトのような問題にも対応 (知と徳——悪性カルトには欠如)

#### (3) 靈的コミュニタリアニズムと靈的共和主義

超越的=靈的美徳—倫理学 (靈的コミュニタリアニズム)

アマタイ・エツィオーニ『ネクスト』(麗澤大学出版会、2005年)

道徳性→基礎を發展

コミュニタリアニズムは全人的美徳

→共和主義 政治参加、自治 civic virtue

〈靈的共和主義 (spiritual republicanism) 〉

参考文献

1. 藤沢令夫『プラトンの哲学』（岩波新書、1998年）
2. 拙稿「政治的クライエンテリズムと政治的シンクレティズム——その概念の構造（4）——」『国家学会雑誌』第105巻、第9・10号、1992年
3. 拙稿「マッキンタイアの美德—小共同体主義——西洋的倫理—政治理論の歴史主義的再生とその限界——（『法学論集』第13巻第4号、1999年）、41-88頁。